
楽しい歴史シリーズ

レイニーシュライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽しい歴史シリーズ

【Nコード】

N1750D

【作者名】

レイニーシュライン

【あらすじ】

たのしく歴史が学べない、ある意味イチャラブ(?)歴史コメディもどき。ポロリもあるよ(発言の)。一話完結で原則的に年代順です。

アグレッシブ縄文時代（前書き）

B L的雰囲気があるといわれればあります。ご注意ください。

アグレッシブ縄文時代

時は縄文時代。

誰がなんといおうと縄文時代。

所は不明。

どこことなく縄文なプレイス。

「やあ田中君」

「おや佐藤君。新しい服だね」

「わかるかい田中君。最新の流行ファッション、ユニクロだよ」

「佐藤君、いま縄文時代だから」

「おっとそうだったね田中君」

「しかもユニクロをファッションと呼ぶのはどうかな佐藤君」

「田中君、それは冒涇だよ、温厚なおれも怒るぜ」

「佐藤君、だからといってナイフ型石器は危険だよ」

「そうだね田中君。主にサヌカイトや黒曜石を打ち欠いて作った刃物だからね」

「そうだよ佐藤君。主にサヌカイトや黒曜石を打ち欠いて作った刃物だからね」

「ちなみに田中君、このナイフ型石器は剥片石器という種類だ」

「さすが佐藤君、博識だね」

「いまならこの穴あき万能ナイフ型石器に果物ナイフもつけてサンキュッパさ田中君」

「佐藤君、いま縄文時代だから」

「おっとそうだったね田中君」

「気をつけないとね佐藤君、二度目だし」

「そうだね田中君、ところで土器を作ってみたんだけどどうちに見にこないかい？」

「おおそれは縄文的だね佐藤君、是非見に行かせてもらうよ」

「どうだい田中君、おれの家は。指紋照合式の鍵だぜ」

「佐藤君、いま縄文時代だから」

「おつとそうだったね田中君、ほら、典型的な竪穴式住居さ」

「地面を掘って柱や梁で骨組みをつくり葦などで屋根を葺いた家だね佐藤君」

「地面を掘って柱や梁で骨組みをつくり葦などで屋根を葺いた家だよ田中君」

「それではお邪魔させてもらうよ佐藤君」

「はいいらっしやい田中君。いまコーヒー淹れるから」

「佐藤君、いま縄文時代だから」

「おつとそうだったね田中君、じゃあ貝とか胡桃しかないけど」

「お心遣いだけ受け取るよ佐藤君。ところで土器は？」

「ああ、ちよつと待って田中君、いまメールがきたから」

「佐藤君、いま縄文時代だから」

「ああ、そうだったね田中君、ご覧、徳利と御猪口を作ってみたんだ」

「佐藤君、チヨイスが渋いよ」

「苦労したのは縄目模様だよ、田中君」

「そついうところは芸が細かいね佐藤君」

「主に縄目模様のついた土器が発掘される時代だから縄文時代だね田中君」

「主に縄目模様のついた土器が発掘される時代だから縄文時代だね佐藤君」

「まあそんなわけはどうだい田中君、一杯」

「佐藤君、ぼく未成年だから」

「田中君、いま縄文時代だから」

「ぼくの台詞を取るのには止めてくれないかな佐藤君」

「誤魔化そうとしてもだめだぜ田中君、ささ、ぐいっと」

「あ、やめ、や、やめてくれないか佐藤君」
「嫌よ嫌よも好きのうち、だよ田中君」
「だ、だから佐藤君、いま縄文時代だか、あ、んんうつ」

終われ

作品についての説明。

登場人物は田中君と佐藤君。

時代はギャグマンガ日和な縄文時代。場所は不明。

ノリはあくまでローテンション。

余談ですが私はローテーションと時折間違える。

佐藤君は割と世界観無視するタイプ。

ツッコまれるとあっさり引くのは、肝心なときの押しのためかもしれない。

趣味は多分田中君をからかうこととか。

田中君はそんな佐藤君へのツッコミ役。

世界観を再三注意するが、本人の名前も世界観無視であることに気づいていない。

割と天然、鈍感ぽい。クールな優等生風味だが押しに弱そう。

佐藤君以外に友達がいなさそう。

下手しなくても続く。

アゲレッシブ縄文時代（後書き）

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

ポジティブ弥生時代（前書き）

GL的雰囲気があるといわれればあります。ご注意ください。

ポジティブ弥生時代

時は弥生時代。

作中そう言い張る。

所は不明。

作中でも明記せず。

「やあ山田さん、ふぁーすとやっぴー！」

「朝から弾けてるわね鈴木さん」

「それはもう弥生時代だからね山田さん！」

「弥生時代にふぁーすとやっぴーはないと思うの鈴木さん」

「それでね山田さん！ それでねそれでね！」

「わかったから落ち着いて、鈴木さん」

「うん、山田さん！ それで弥生土器を作ったんだけど見て？ 見て？」

「はいはい、あら、素敵なカップね鈴木さん」

「山田さん、いま弥生だよ弥生！ さかずき、っていうんだよっ！」

「あ、そう、それにしても持ちやすいわね、ビールでも飲もうかしら鈴木さん」

「山田さん、あたしたち未成年だからっ！」

「何言ってるのよ鈴木さん、ビールなんてお酒のうちに入らないわ」

「密かに不良入ってるよ山田さん！？」

「あなた珍しく純粋な子ね鈴木さん、ところでそれは？」

「あ、これね、これね山田さん、石器って言うんだよ石器！」

「知っているわ、鈴木さん、それも磨製石器ね」

「山田さん、ま、ませーせっきってなにな、なになっ？」

「打製石器を他の石材で研磨した石器のことよ、鈴木さん」

「……………山田さん物知りだねっ！ 羨ましいっ！」

「私も鈴木さんの無知さは時折羨ましいわね」

「……………むちつてぴしーってやるやつかな、山田さん？」

「それにしてもここら、主な原料のサヌカイトは採れないはずよね鈴木さん」

「あ、これね、これね、佐藤君にもらったんだよ山田さん！」

「……………ふうん……………そう、よかったわね鈴木さん」

「……………あ、あれえ？ お、怒ってるかな山田さんっ？」

「怒る必要性なんて欠片ほどもないじゃない、変な鈴木さんね」

「そ、そうだね山田さんっ！」

「ああ、そうね、この頃は流通が発達してくる頃だったわね鈴木さん」

「ま、また難しいこと言っていないかな山田さんっ？」

「簡単よ鈴木さん、石がある所の人沢山作って各地に広めてくれるの」

「じゅよーときょーきゅーだね、山田さんっ！」

「難しい言葉を知ってるのね鈴木さん」

「えへへえ、すごいでしょ山田さんっ！」

「わかってるかどうかは別よね鈴木さん」

「や、山田さん？」

「そういえば、他にも中国から鉄器と青銅器が伝わってきたわね鈴木さん」

「あ、そうだねそうだねっ、あれ便利だよ山田さんっ！」

「そうね鈴木さん。実際は青銅器は祭具として使われ、実用品は鉄器だけど」

「でもそのせいでか、最近争いも多いよね山田さん……………」

「そうね鈴木さん。後々教える側の中国まで侵略されるんだから歴史って皮肉ね」

「く、黒いよ山田さんっ！ まだそーゆー時代じゃないからっ！」

「あらそうだったわね鈴木さん。確か最近には邪馬台国が台頭してるわね」

「そうだよ山田さんっ、卑弥呼様がクニを治めてるのっ！」
「沢山のクニをまとめて中国に朝貢してたのよ鈴木さん」
「凄い人だよね山田さんっ、尊敬しちゃうっ！」
「よほど中国にこびへつらったのかしらね鈴木さん」
「黒っ！？ 黒いよ山田さんっ！？」
「なんでも占いで政治を行ったらしいわね鈴木さん」
「あ、そうだよそうだよ山田さんっ、どんな占いなんだろうっ？」
「少なくとも朝の天気予報より当たらないと思うわ鈴木さん」
「だから山田さん、いま弥生、弥生っ！」
「占いで国をまとめるなんてよほど口が回ったのね鈴木さん」
「山田さん卑弥呼様に恨みでもあるのっ！？」
「別にないわよ鈴木さん、ただね」
「な、なにかな山田さんっ？」
「私といるときに他の人の話しないでね鈴木さん」
「や、山田さんっ？ ちょ、え、あ、あああああ……」
「それでは皆さんごきげんよう、山田さん行くわよ」

終われ

ショートショート二弾。

作品説明。

登場人物は山田さんと鈴木さん。
時代は混迷の弥生時代。場所は不明。
ノリをちよつと変えてみたら変になった。
やはり妙にテンション高いと崩れるみたいです。

山田さんは優等生タイプと見せかけて隠れ不良。

鈴木さんに対して独占欲丸出し。多分S。

前回の田中君のポジションと思いきや佐藤君ポジション。

鈴木さんは元気はつらつ脳みそパー。

気づいたらこうなってた可愛そうな人。

山田さんの犬っぽいが多分Mではない。

元気なキャラを書こうとすると必ずバカになるのは私の癖です。

アグレッシブ縄文時代をもとにしたのに、レベルが下がった不思議な作品。

多分このままだと続く。

ポジティブ弥生時代（後書き）

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

ネガティブ古墳時代（前書き）

初の非同性愛的雰囲気ですが、今度は枯れました。ご注意ください。

ネガティブ古墳時代

時は古墳時代。

もはや大多数が認めていない。

所は不明。

要脳内補完。

「あら高橋くん、お久しぶり」

「おや渡辺さん、久しぶり」

「高橋くん、最近姿を見なかったけれどどうしていたの？」

「ああ、古墳造りに呼ばれてたんだよ渡辺さん」

「古墳というところの大きなお墓ね高橋くん」

「そうだよ渡辺さん、権力の大きさを示しているね」

「まるでお山の大将ね、高橋くん」

「渡辺さん、一応、時の権力者だから」

「そうね高橋くん、でもどのくらい偉いのかしら」

「ヤマト王権の端くれとはいえ所詮地方レベルかな渡辺さん」

「それは市長ぐらいのものかしら高橋くん」

「県知事ぐらいかもしれないね渡辺さん」

「でも一般ピーポーに過ぎない私たちには関係ないわね高橋くん」

「そうだね渡辺さん、どっちにしろお上には変わらないし」

「きつと適当に尻尾振っておけば満足してくれるわね高橋くん」

「権力に媚を売るつもりはないけどそれが平和だよ渡辺さん」

「ところがそうでもないみたいよ高橋くん」

「おやそうなのかい渡辺さん」

「ええ高橋くん、高句麗と戦争しているみたいなの」

「ああ、そういえば今朝の新聞に出ていたね渡辺さん」

「毎朝欠かさず新聞を読む未成年って少ないわよね高橋くん」

「……………」
「……………」
「渡辺さん、ツツコまないと、そこ」
「そういえばいまは古墳時代だったわね高橋くん」
「そうだよ渡辺さん、仁徳天皇陵やキトラ古墳で有名な古墳時代さ」
「でも高橋くん、読者含め作者すら否定的よね」
「それでも主張することが僕たちの使命だよ渡辺さん」
「本音をどうぞ、高橋くん」
「内容を否定したら僕らの出番も没だからね渡辺さん」
「そうね高橋くん、なにせ私たち没個性だから」
「……………」
「キャラクター性がないから設定に頼らなきゃね高橋くん」
「渡辺さん、自虐的になるのは止そう」
「あら高橋くん、慰めてくれるのね」
「没個性ならクラス内にも馴染めるじゃないか渡辺さん」
「それは埋没してるんじゃないかしら高橋くん」
「……………」
「……………」
「あなたと友達になれた理由がわかった気がするわ高橋くん」
「僕もなんとなく理解した気がするよ渡辺さん」
「これは高橋くん、きつと同類相憐れ」
「渡辺さん、一層虚しくなるから止めよう」
「そうね高橋くん、ところでいま思ったんだけど」
「なんだい渡辺さん」
「もうネタがないわね高橋くん」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「僕ら頑張ったさ渡辺さん」
「そうね頑張ったわ高橋くん」
「世の中頑張りだけじゃどうにもならないこともあるってただね渡辺さん」
「そうね、アドリブじゃ私たちが進まないものね高橋くん」
「でもこれでは落ちないね渡辺さん」
「なにかここでひとつ必要な高橋くん」
「なにかあるかな、渡辺さん」
「それじゃあ、高橋くん」
「なんだい渡辺さん」
「気絶落ちにしましょう高橋くん」
「え？ ……っ!？」

終われ

連載気味なショートショート第三弾。

作品概要。

登場人物は渡辺さんと高橋くん。
時代は落日の弥生時代。場所は不明。
ダウンナー系のノリにしたら落ちが消えた。

しかし一番書きやすいテンションでした。

渡辺さんは多分クラスの女子と仲悪そう。

というかグループづきあいとかがなさそう。

毎朝新聞を読むダウナー系少女。

密かに毒舌だが自分にも向けられる。

作中クラスに埋没しているとツッコむが、

むしろ彼女らのようなタイプは浮いていて目立ちますね（経験談）。

高橋くんもクラスで孤立していそう。

会話する以前に雰囲気とかで。

毎朝新聞を読むダウナー系少年。

人生を悟ったような諦めたような。

初の男女ペアだが欠片ほどの恋愛要素も見られない。

むしろ同性ペアのほうがなにかしらアクションがあったのは何故？

どっちも枯れていそうなところは私の内面かもしれません。

最後のシーンはご自由に脳内補完してください。

きつとこれ続きますねえ。

ネガティブ古墳時代（後書き）

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

アクティブ飛鳥時代（前書き）

痛々しい表現を含みます。ご注意ください。

アクティブ飛鳥時代

時は飛鳥時代。

だれが認めるというのか。

所は不明。

場所に意味はあるのか。

「法隆寺の五重塔が有名ね伊藤、以上」

「終わっちゃダメだってば山本」

「いいじゃない伊藤、誰も期待なんかしてなかったわ」

「俺たちも含めてそうだが、ダメだってば山本」

「別にやったところでギャラが出るわけでもないじゃない、伊藤」

「すぐに金銭に結びつけるのはよくないぞ山本」

「その金銭がすべての価値だというのが資本主義よ伊藤」

「生憎と経済には興味がないんだよ山本」

「興味がなくてもこの国はそういう法律なのよ伊藤」

「その法律ができ始めたのがこの時代だな山本」

「あくまでも続ける気ね伊藤」

「まあ飛鳥時代だから仕方ないな山本」

「そうね飛鳥時代だから仕方ないわね伊藤」

「さて大雑把に言くと聖徳太子が生まれた頃だな山本」

「そうね厩戸の皇子の頃からがはじまりね伊藤」

「日本が国として固まり始めた黎明の頃だな山本」

「まあその分動乱の頃と言ってもいいけどね伊藤」

「朝廷内においてかなりのごたごたがあったようだな、山本」

「まあ私は興味無いのだけどね、伊藤」

「百濟復興のため朝鮮に出兵したがボロ負けしたりしたな、山本」

「何それ伊藤、私知らないわよそれ」

「白村江の戦いという奴だよ山本」

「聞いたことがないでもない名前ね伊藤」

「お前の進学がはなはだ心配だよ山本」

「私もこんなことをやっていると心配になるわ伊藤」

「一応これも学習の一環だ山本」

「こんなの全国の中学高校生に申し訳ないわ伊藤」

「全国の中学高校生はこんなもの見ていないから気にするな山本」

「まあそうね伊藤、ところで」

「なんだ山本、まだネタ切れではないぞ」

「いえ、これ飛鳥時代なのよ伊藤」

「おっとそうだったな、律令制度ができた飛鳥時代だったな山本」

「ええそうだったのよ、律令制度ができた飛鳥時代だったの伊藤」

「とはいえこのネタもとりのあえずでやっている気がするな山本」

「一応これがロールプレイングだという主張なのよ伊藤」

「そんなものはもう今更だと思うがな山本」

「こんなものをやらせる側に言ってほしいわ伊藤」

「俺はいい点さえ貰えれば何も言うことはないんだ、山本」

「あなたのそう言う正直なところはいつそすがすがしいとさえ思うわ伊藤」

「だからといって好きでやっているわけではないと付け加えておくぞ山本」

「そういうこと正直に言っちゃあたりが点数とれない理由だとは思っわ伊藤」

「なんとなくは察していたが性格まで変えようとは思わないな山本」

「クラス内に馴染めない方向で个性的よね伊藤は」

「何事にも受け身なお前よりはましだと思っぞ山本」

「流れに身を任せると言ってほしいわ伊藤」

「激流に身を任せ同化するのか山本」

「激流を制するのは清水なのよ伊藤」

「お前の場合は淀んで動かないだけの気がするがな山本」

「肯定するわ伊藤」

「そう言うところばかり積極的だな山本は」

「積極的な引っ込み思案なのよ伊藤」

「さっぱりわからないな山本」

「言った私もさっぱりだわ伊藤」

「まあそんなことよりもプレゼンの続きだ山本」

「あくまで飛鳥時代よ伊藤」

「日本が中国に対等を求めた時代だな山本」

「日本が中国に対等を求めた時代だわ伊藤」

「さて俺はまだまだネタがあるんだがどうだ山本」

「私はもういい加減おなかいっぱいだわ伊藤」

「ならこの位でいいだろうか山本」

「別にいいと思うわ伊藤」

「ならあとはオチだけだな山本」

「そうね、後はオチだけね伊藤」

「高橋たちがあまりにも色気なかったからいちやつくか山本」

「あなたの口からいちやつくという言葉を書くとは思わなかったわ

伊藤

「そう言うギャップは印象が強いらしいからな、山本」

「じゃあ私もそう言うのをやってプレゼンをしめるべきかしら伊藤」

「そうだな、やってみて損はないと思うぞ山本」

「きやはっ 伊藤くん、これで終わりだぴょん」

「..... 山本」

「..... わかってるわ伊藤」

「..... 以上で..... 終わりでもいいな、山本」

「..... ええ..... 終わりましたよう、伊藤」

終われ

連載しちゃったショートショート四弾。

作品説明。

登場人物は山本と伊藤。

時代は激動の弥生時代なのか。場所は不明なのか。気づいたら他より歴史言及が多くなっていました。相変わらず歴史を学べませんが。

山本は激流に身を任せ苔生していく川底の石とか。生きながら腐っていくようなやる気のない女子D。ダウナーというより面倒くさがり屋。

積極的にひきこもる。

女子が表面上仲良くつるんでいるのが理解できない女子。ある意味私はこういうタイプです。

伊藤はなんだろう。

積極的というか、やるべきことはやるタイプ。

悪いやつではないがクラスに馴染みにくいタイプ。

話しかければ答えるが、自分からはアクションを起こさないような。グループ活動では周りが遊んでいる間に仕上げちゃうみたいな。

多分山本意外に友達いない。

なんでこう、友達いなさそうな奴しかいないんだろこのシリーズ。

このまま続けどこかへ。

アクティブ飛鳥時代（後書き）

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

センチティフ奈良時代（前書き）

内容的にもシリーズ的にも行き先を見失っています。ご注意ください
い。

センシティブ奈良時代

時は奈良時代。

もうどうでもいいや。

所は不明。

もうどうでもいいや。

「はい、では始めてください中村くん」

「は、はい、小林先生、ぼくの班は奈良時代です」

「この時代はおおよそ80年ほど続きますね中村くん」

「はい小林先生、えっと、ななひやく、ななひやく、」

「広義では710年から794年までですね中村くん」

「ひいつ、ご、ごめんなさい小林先生……っ！」

「いいですから中村くん、年号の覚え方やったでしょう」

「あ、えと、えと、なんときれいな平城京、です！」

「そうですね、元明天皇が平城京に遷都したのが始まりですね中村くん」

「は、はい！へ、平城京が奈良に置かれたので奈良時代です小林先生！」

「そうですね中村くん、ちなみに平城京は京都と同じ碁盤目状でした」

「え、えと、小林先生、平城京は、色んな国の人に来てました、よね？」

「そうですね中村くん、平城京は当時としてはかなり国際的な都市でした」

「中国や朝鮮、インドの人も来てた、んですよね小林先生」

「ええ中村くん、シルクロードの終着点ですから人が集まったようです」

「で、でも川がないので水がなかったりして大変だった、んですね小林先生」

「そうですね中村くん、でも私じゃなくて皆に言ってください」

「ひいつ、ご、ごめんなさい小林先生……っ！」

「いいですから中村くん、続けてください」

「は、はい中村先生！ えと、え、あ、ああつのつ、」

「落ち着いてください中村くん、ゆっくりでいいですから」

「は、はひっ！ え、あああ、え、うぐ、うう、うううう……っ！」

「落ち着いて中村くん、大丈夫ですから」

「うう……うわあああああんっ！」

「落ち着いて、落ち着いて中村くん……伊藤くん、カメラ止めてカメラ」

〈五分後〉

「失礼しました。中村くん、続けてください」

「は、はい小林先生！ こ、この時代は、あの、ほ、法律がっ」

「名前、名前言ってください中村くん」

「ひゃいつ！ た、大宝律令を改善していつて、ました、よね……小林先生？」

「そうですね中村くん、この頃は戸籍なども揃い税のようなものもありました」

「え、あ、えと、租・庸・調ですね小林先生！」

「はい、よくできました中村くん」

「はいっ、小林先生！」

「でも中村くん、私じゃなくて皆にね、言ってください」

「ひいつ、ご、ごめんなさい小林先生……生まれてきてごめんなさい

…っ！」

「いいですから中村くん、続けてください」

「は、はい中村先生！ えと、うう、あう、あ、あぐう、」

「落ち着いてください中村くん、ゆっくりでいいですから」

「は、はひっ！ え、あああ、うう、ふう、うう、うく……っ！」

「落ち着いて中村くん、大丈夫ですから」

「うう……うわああああんっ！」

「……落ち着いてください中村くん。山田さん、カメラ止めてカメラ」

〈十分後〉

「失礼しました。中村くん、続けてください」

「う、ぐず、小林先生、えと、あの、」

「中村くん、ゆっくりでいいですから」

「え、えと、あの、小林先生、ちよつとノート見ていいですか？」

「中村くん、いま奈良時代ですから」

「え、え、えう、小林先生え……」

「冗談です中村くん」

「あ、そ、そうですね小林先生」

「中村くんにロールプレイングを期待するほど先生鬼じゃありません」

「え、あの、小林先生？」

「中村くん、続けてください。ノート見てもいいですから」

「あ、はい、小林先生。えと、この頃は天平文化が有名です」

「簡単に言ってしまうえば中国の影響を受けた貴族・仏教文化ですね中村くん」

「はい、えと、お寺や仏像がたくさん作られてたんです…よね、小

林先生」

「有名な建築物や仏像は全部この時代だと思ってもいいんじゃないですかね中村くん」

「え、あ、えと、多分、そうです、小林先生」

「もつぶつちゃけ大仏だけでいいですよ覚えるの、そう思いません中村くん」

「え、あ、えと、その、小林先生がいうなら、その」

「まあそういうわけでこちら辺で終わりましたよう中村くん」

「え、あ、はい、そうしましょう、小林先生」

「正直先生も疲れちゃいましたし、ねえ中村くん」

「ひいつ、ご、ごめんなさい小林先生…隣りで息してごめんなさい…っ！」

「違いますから中村くん、落ち着いてください」

「ひゃいつ！ ご、ごめんばばいつ、ひう、ぐふう……っ！」

「落ち着いて中村くん、大丈夫ですから」

「うう……うわあああああんっ！」

「……勘弁してください中村くん。佐藤くん、カメラ止めて、笑ってないで」

「びええええええええええええんっ！」

「佐藤くん、カメラ止めて。笑ってないで、ちょ、佐藤カメラ止める」

〜二十分後〜

「お疲れさまでした中村くん」

「うっ、ぐす……はい、小林先生」

「次の班の子は準備しておいてください。

あと佐藤君は後で職員室に」

「小林先生え……ごめんなさいい……」
「……………もうやだこのクラス……………」

終われ

連載しているらしいショートショート第五弾。

作品説明。

登場人物は中村くと小林先生（と伊藤くと佐藤くん）。
時代は黎明の奈良時代らしい。場所は不明らしい。
もはや体裁さえ保てなくなったこのシリーズ。
皆さんご存じでしょうがこのシリーズで歴史は学べません。

中村くんは臆病極まりないもやしっ子。
怒られてなくても身がすくむタイプ。
虐められてるわけじゃないのに心は傷だらけ。
ついでに周りのハートも傷だらけ。
メンタルが弱いために生きるのが不器用な子。

探せば割にいる気はする。

奥手で人付き合いが苦手で二人組を作れず余って先生とペア。
おぎゃーんと先生に泣きつく今日この頃。

小林先生は事なかれ主義。

できればスムーズに物事をすすめたい。

面倒事を早く終わらせたがる。

割と投げやりなで大抵のものはどうでもいいタイプ。

それが平等扱いに見えるのか臆病な小動物に懷かれた今日この頃。

そもそも友達を増やしたくない人種なのに。

面倒くさがりだけと義務は義務できっちりこなさないと気持ちが悪
いのだとか。

生徒はみんな半分人間になりかけの動物だと思ってる。

なんかこう………方向性を間違えた気がするにやー！。

続けば続くと思うし、続かなければそれもやぶさかではない。

センチタイプ奈良時代（後書き）

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

アトラクティブ平安時代

時は平安時代らしいぜアニキ。

そこんところしく。

所は不明らしいぜアニキ。

そこんところしく。

「家帰ってまで勉強するやつの気が知れねえよ吉田」

「難しく考えるからいけねえんだよ斎藤」

「どう考えても勉強は勉強だろ吉田」

「勉強って考えるんじゃないやねえ、斎藤。学習だ学習」

「言い方変えただけじゃねえか吉田、俺は騙されねえぞ」

「最近の政治を見るにお前の態度は素晴らしいけどな斎藤、違っただよこいつは」

「なにが違っんだよ吉田」

「勉強は強いて勉めるから辛いんだよ。学んで習うと考えんだよ斎藤」

「お前なんか難しいこと言ってねえか吉田」

「あれだよお前、勉強は面倒くせえって思ってるだろ斎藤」

「当たり前だよ吉田」

「嫌なもん無理にやろうとすつから面倒くせえんだよ斎藤」

「さつきからお前、俺のことおちよくってんのか吉田」

「違えよ斎藤、楽しくやりゃあ勉強もいいもんだぜ斎藤」

「できねえから言っただろ吉田」

「じゃあ教えてやつからよ、教科書出してみろよ斎藤」

「ねえよ吉田、学校に置いてきてんに決まってるだろ」

「じゃあ俺のでもいいけどよ、俺らがやる平安時代見てみろや斎藤」

「ぱつと見、なにがなんだかわかんねえな吉田」

「拒否反応起こしてんじやねえよ斎藤、大体どんな時代だこれ」

「知らねえよ吉田。平和で安全って書くんだからよお、そうなんじやねえの」

「違えんだよ斎藤」

「マジかよ吉田」

「お前、あのサムライ知ってんだろ斎藤」

「当たり前だろ馬鹿にしてんのか吉田、俺大河ドラマとかマジ好きだから」

「お前大河ドラマ見てんのに歴史わかんねえのかよ斎藤」

「お前、それはあれだろ、わかんねーところは聞き流してんだよ吉田」
「俺なんか解説まできっちり見てるぜ斎藤」

「お前すげーな吉田」

「お前あれだよ、続きものの漫画で一卷だけ抜けてたら手に入るまで読まねーだろ斎藤」

「読まねーけどよ、なんか違わねえか吉田」

「同じだよ、きっちり最初から最後まで見ねえとすつきりしねえだろ斎藤」

「あの御長寿探偵漫画は2、3巻飛ばしても違和感ねーけどな吉田」
「推理編と回答編、別の組合わせても何となく納得するよな斎藤」

「もはやギャグ漫画の勢いだからな吉田」

「違えよ斎藤」

「いやあれはギャグ漫画だろ吉田、殺人の動機とか…」

「それは同意だが話ずれてんだろ斎藤」

「おう、そうだな吉田、あの、あれだろ、天地人の話だろ」

「そこから始めたら無限ループだぜ斎藤」

「あー……あれか、新撰組か吉田」

「時代が違いけど近いな斎藤、武士だ武士」

「おっ、思い出したぜ吉田」

「あれ生まれたのこの時代だから、斎藤」

「マジかよ吉田」

「武士っつーんだけどよ、戦うの専門の家みて のがきんだよ斎藤」

「全然平和でもねーし安全でもね な吉田」

「あとお前、あれだよ、源氏と平氏って知ってるだろ斎藤」

「それはお前、あれだよあの……弁慶のやつだろ吉田」

「正確にはそいつのボスが源氏だけだよ斎藤、それもこの時代」

「マジかよ吉田」

「牛若丸は若い頃の名前で、源義経っーやつだよ斎藤」

「あー、聞いたことあるぜ吉田」

「ちなみにこいつ手柄立てたのに兄貴に追放されてんだよ、斎藤」

「ひっでーなその兄貴、スキャンダル物じゃねーか吉田」

「まあ平安時代だからな斎藤」

「全然平和でもねーし安全でもね な吉田」

「名前と実際が違うのはよくある話だろ斎藤」

「いや、でもそこはぴったり合ってねえと困るだろ吉田」

「いいんだよ斎藤、トップが悪い例を実践してんだからよ」

「政治ネタはやめるよ吉田、馬鹿にされてるみてえだ」

「いや斎藤、俺もよくわかんねーんだけどよ実は」

「あれだな、俺らニユースに踊らされてんな斎藤」

「なんとかしねーといけねーんだろうけどな吉田」

「実際問題何したらいいかわかんねーもんな斎藤」

「危機意識が足りねーっつわれてもなあ吉田」

「そういう風に育てた側が文句言ってるのが困るな斎藤」

「ところで吉田、あれはどうしたんだよ、あの、なんつったっけ」

「お前よ、ツーカーじゃねえんだから通じるかよ斎藤」

「あれだよあの、弁慶の兄貴だよ吉田」

「弁慶じゃねえよ斎藤、義経だよ」

「あー、そいつそいつ。その義経の兄貴はどうなったんだよ吉田」

「実は俺も知らねーんだよ斎藤」

「マジかよ吉田、知らねえのに解説してたとかパネエ」

「俺は知らねーけど教科書書いてあんだろ、読もうぜ斎藤」
「そうだな、なんか気になってこのままじゃ夜も眠れねーぜ吉田」
「こうしてみつとよ、結構面白いだろ斎藤」
「マジだな吉田、いまならレポート書けそうだぜ」
「なんのだよ斎藤」
「あの、あれだよ………弁慶」

終われ

べ、別に大晦日記念SSなんかなじゃないんだからねっ。
時間があつたからたまたまよ、たまたま！

作品についての説明。

登場人物は吉田と斎藤。

時代は暇を持て余した若者のだべりな平安時代かも。場所は不明かもね。

もはやプレゼンの形態すらしていない。

何かに興味を持つことが楽しい勉強の第一歩です。

吉田は意外とそこその成績は取るタイプ。

勉強のコツは面白いと思つてやること。

タバコも酒もやらないけれどかといつて優等生でもない。

特にやることもないダウナーな日々をゲーセン行ったりだべったりして過ごすとか。

結構きつちりした性格で、CDは聞き終えたらきちつとケースに収めて棚に戻す。

斎藤は口は悪いが素直なバカ。

余り頭も気遣いも良くないが大抵の話題に食いつくので会話に困らない。

割とルーズでだらだら毎日を生きているが、人付き合いはいいとか。授業中寝ているので成績が悪いとか。

終わりの見えない連載漫画を何ループでも読める気長な性格。

後半になるにつれてキャラクターが見え始めた気がしました。

あらゆる事態に注意しながら続けていくことを考慮したい。

アトラクティブ平安時代（後書き）

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1750d/>

楽しい歴史シリーズ

2010年10月17日03時20分発行